

# 作文の部



「おばあちゃんの手」

藤沢小3年  
神原彩花さん



「お手伝い」

土浦第二小4年  
中野里咲さん



「ぼくの変身」

右衾小5年  
高橋幸人さん



「ゴミ拾い登山をして  
環境を考える」

都和南小6年  
柴山 昇さん



「家族の輪」

土浦五中1年  
大矢彰吾さん



「空からの贈り物」

土浦四中2年  
鴻巣明日香さん

## 「おじいちゃん のうちにいったよ」

大岩田小2年 藤村峻平



八月十四日、お父さんとお母さんと妹とぼくで、しんかんせんにのって、たんばのおじいちゃんのうちに行きました。

山と田んぼにかこまれたふるい大きないえでした。

いえについてすぐ、はなれのへやにオニヤンマが入ってきました。あみでとろうとしたら、ガンガンかべにぶつかかったので、やつととれたと思つたら、頭がとれてしまつてちよつとかわいそうでした。でも、ぼくの大きな虫がたくさんいそいだな、と思いました。

さっそく、妹とぼくは、たくさんのはややろうか、おにごっこをしてあそびました。くらもちキドキしました。むかしのでんわがあつて、ダイヤルを手でまわしてかけるでんわでした。妹がおもしろがついていつまでもあそんでいました。ほかにもおもしろそうなものがたくさんありました。

外に出ると、いどがありました。水を出してみると、水どうの水よりも、すぐつめたくて気持ちよかったです。たらいに水を入れてあそびました。

おじいちゃんのおうちのまわりは、しぜんがいっぱいです。

虫とりもしました。ウスバキトンボをとりました。すぐくすばしっこくて、なかなかつかまえられなくてお父さんにとつてもらいました。

おはかまいりに行くときゅうでは、へびを見ました。ぼくは、はじめてへびを見ました。たんばには、たくさんへびがいるそうです。気をつけるように言われましたが、こわいと思う間もなく、するするにげていきました。

木の下に立つと、セミの音がうるさいくらいです。セミのぬけがらもたくさん見つけました。セミのうかを見ようと思つて、夕方よう虫をさがしに行きました。でも見つからずさんねんでした。セミがさなぎからうかするようすは、きつとすごいだろうなと思います。

夜、みんなでごはんを食べる時、でん気をつけると、あみ戸の外に小さな虫がたくさんあつまつてきて、それをヤモリが食べにきます。そつとちかづいてパクツと食べます。すばやく食べるようすがとてもおもしろいです。

いよいよ帰る日になりました。帰るとき、でん車のえきに大きなオニヤンマが入ってきました。オニヤンマにさよならをしました。

「また、あそびに来るからね。」  
オニヤンマも

「まつてるからね。」  
と、言っているように思いました。

しぜんがいっぱいで、むかしのにおいのする大きなおじいちゃんの家。とつてもたのしかったです。来年もなつ休みにまた行きたいな。そして、手作りのむかしの水でつぼうであそんでみたいですね。

(原文のまま)

## 「家族の絆」

土浦五中3年 高松拓也たかまつ たくや



「たっくん、お帰り！」

部活から帰るといつも、元気な声が響きわたる。

僕を待っていたかのように、年の離れた弟の賢吾が玄関まで走ってくる。そして、ちょこんと隣に座り、僕のことを何がおもしろいのか、だまつて見ている。部活の道具であるグローブやスパイクを、手入れしている間もずっと。少年団のころ「練習用のユニフォームに泥がついているから、玄関で脱ぐように」と母に言われてから、ずっとそうしているが、弟には不思議な光景に見えるらしい。ソックスを脱ぐと必ず「お兄ちゃん、臭い」と舌を出して言うくせに、そばから離れようとしないう。チヨロチヨロとまとわりついて、うるさいと思うこともあるが、弟が病気で、いつもの「たっくん、お帰り！」が聞こえない時はやっぱり寂しい。

弟の賢吾が生まれたのは僕が小学校四年生のときだ。まだ、母が入院中で、身の回りの世話をしてくれたのは、母方の祖母だった。ちょうどその頃、三学期の授業参観があり、母の代わりに、祖母が参観してくれたことは、今もはっきりと覚えている。僕に寂しい思いをさせないようにと、祖母の計らいだったにちがいない。担任の先生が「拓也君のおばあちゃん、ご意見をお願いします。」と祖母

を指し、こっそり参観して終わるはずの祖母は注目を浴びてしまった。その日の夕食は父と祖父を交えて、その話題で盛り上がり、入院中の母へも電話で報告した。そんなことがあって母が入院中は寂しい思いもせず、元気に過ごすことができた。

母と弟の賢吾が、退院して帰ってきた。それまで、ザリガニ、カブトムシやベットでハムスターを飼ったくらいしか僕には、ふにゃふにゃの赤ちゃんはどう接していいのかわからなかった。ミルクを飲み、おぎゃーおぎゃーと泣くばかり。いつたいこの生物がきちんと人間になるのか不思議に思っていた時期であった。

父母は賢吾が声をあげて笑うのを見て、とても喜んでいた。首が据わったとき、ハイハイしたとき、つたい歩きをしたとき。どんなささいな動作にも、「はじめてできた。」ということだけで、こんなにうれしくなるものかと、小学生の僕は、第三者的な目で見てきたが、最近では、自分もこんな風に見守られて育ってきたんだと思うようになった。

人間は、すごいと思う。それは、身近にいる弟の成長していく過程を見ていてそう思う。保育所に通うようになってからというもの、一人で着替えもできるようになり、言葉も理解し、話せるようになった。それと同時に、僕は賢吾がかわいく思えるようになった。野球をしている僕の姿を見て、「けんごもたっくんみたいに野球やる。」とプラステックのバットを振り、まねをする。「パパやママがいなかったらどうする。」という質問を父がすると、生意気に、どこで覚えてきたのか腕を組み、少し考えた表情を見せて「おにいちゃんのだっくんがいるからだいじょうぶ。」と答えた。それを聞き、プツとふきだしそうになったが、兄として頼られているということを知り、僕は、兄弟、肉親という、

いとおいしい感情が芽ばえてきた。

今年、七五三を迎えるということで、母は準備をはじめだした。僕が着たという着物を出し、親戚みんなが笑顔で祝ってくれている写真を出してきて、十年ぶりに見せてくれた。しかし、僕には正直、まったく記憶がなかった。豪華な料理がテーブルに並んでいる。緊張した顔で羽織袴を着て、祖父母といっしょに写っている。スーツ姿になっている写真もあった。母から「懐しいわ。覚えている？」と聞かれたが、そっけなく「覚えていない。」と答えた。けれど、なんとも言い表せない、うれしい気持ちがかみ上げていた。今まで、自分ひとりで大きくなってきたかのように、何も考えずに過ごしてきたが、目に見えない大きな愛情と家族の絆があつて、これまで成長してきたのだと感じた。なに不自由なく、好きなことをさせてくれて、「ありがとう。」という感謝の言葉しか思いつかない。そしてこれからはキラキラと輝いた純粋な目を、くもらせることのないように弟の賢吾の「手本」となるよう、胸を張って生活していきたい。

部活を引退した今は、仕事帰りの母といっしょに保育所から帰ってくる弟に「けんちゃん、おかえり！」と玄関先で、僕が出迎えている。

(原文のまま)

